

エボラ発生は国連のワクチン運動と時期が一致する

By Yoichi Shimatsu, Exclusive to Rense.com

August 12, 2014

疑いもなく犯罪行為

エボラ流行熱は、国連の諸機関が元フランス領ギニアの村落地帯で、3つの他の病気のための全国的なワクチン運動を進めていた2月下旬に始まった。この紐状ウィルスが、いくつかの大きく離れた地域で同時に発生したことは、この致命的なザイール・エボラ種 (ZEBOV) が意図的に導入されて、解毒剤をひそかに試すために、それとはまったく知らない人々に用いられたことを示唆する。

エボラが国境を越えて隣のシエラ・レオネとリベリアへ入ったことは、ある大手の製薬会社による不法な臨床実験の最中に、何か恐ろしい間違いが起こったことを指し示すだろう。漠然と浮かび上がってくるのは、エボラの流出が、植民地時代後のこの鉱物の豊かな西アフリカを支配するための、バイオ戦争行為だったかもしれないということである。

今年初め、田舎地方の住人達は、外国基金の医療計画によるワクチンを受けようと、熱心に列を作っていた。しかし最初の病気発生の隠ぺいが、西アフリカの人々をパニックに陥れて以来、田舎の人たちは、噂される民族抹殺キャンペーンを怖れて、国際的な援助計画によるどんな治療も忌避している。この集団ヒステリーはまた、西洋人の小児性愛者に昔から狙われている地域でも火が付いた。このためにホモと思われる若い男たちを襲撃して殺すということも起きている。エボラは恐怖と憎悪を大きく掻き立てた。そしておそらくこれこそ、意図された不安定化戦略の目的である。

エボラ危機についてのこの一連の調査報告は、西アフリカの人々が、人間の知る最も致命的なウィルスを、誤ってか故意によってか、流出させてしまった西洋の援助諸団体を、全く信用できない十分な理由があることを明らかにするものである。

私がすでに発表した2つの論文は、エボラから生物兵器を開発し、その解毒剤から商業的利益を得る上での、イギリスとアメリカの役割を調べたものだった。この3番目のエッセーは、ギニアにおける最初のエボラ発生と、世界保健機構 (WHO) と国連 (UN) の子供機関ユニセフ (UNICEF) による3種のワクチンのキャンペーンが、不思議にも同時に起こったこと

に注目する。ワクチン接種計画の少なくとも2つは、「国境なき医師団」(Medicins Sans Frontieres)によって実行されたものである。一方、これらのワクチンのあるものは、サノフィ・パスツール社(Sanofi Pasteur)の製造したもので、これはロスチャイルド・グループを最大の株主とするフランスの製薬会社である。この報告は、エボラについてのフランスとアフリカの関係を明らかにする。

人間モルモット

新薬のテストで用いられる guinea pig (テンジクネズミ、通常モルモット)は、ブタでもなければギニア産でもない。その自然の生息地は別の大陸、特にアンデス地方である。ギニアにおける最初のエボラ発生時に使われた被験動物は、げっ歯類でもブタでもなかった——それは人間だった。

エボラ発生の中心にある謎は、どうやって 4000km も東の、中央アフリカのコンゴ(ザイール)地方で発生した 1995 ザイール種(ZEBOV)が、10年後の今になって、突然、西アフリカのギニアに再出現することができたのかということである。人の通行によるエボラ感染の証拠は、空港にも、海港にも、幹線道路にも見出されていないから、最初の感染は2つのルートのどちらかによるものでなければならない——

その1——不詳「患者A」の可能性。猛威を振るった 1995 年のザイール流行熱の生き残り、おそらく医者か医療従事者が、眠った状態のウィルスをギニアに持ち込んだ。患者Aの一つの例は Patrick Sawyer で、この感染したリベリアの米在住者が、最初にエボラをナイジェリアに持ち込んだ。国の保健省や国際的機関は、ギニアにおけるエボラの最初の症例を、追跡するとか突き止めようとする何の試みもしていない。これまでのところ、最初の犠牲者が外国人なのか、あるいは外国から帰ったギニア人なのかさえ、明らかにした証拠は何一つない。

その2——患者Aが存在しないのであれば、ギニアの村落で、エボラの新しい解毒剤の人間による不法なテストが、別の病気のワクチン接種計画だとして偽ってなされた可能性が残る。このひそかな臨床実験の目的が、市民の健康のためだったのか、軍隊で用いる抗体をベースにした解毒剤のためだったのかは、いまのところ断定できない。

個人の持ち込み説よりもワクチン・キャンペーンを疑う理由は、このエボラ感染が単独の地理的中心から始まって、道路沿いに広がっていったのではなかったことである。そうではなく、多数の症例が、ギニアの田舎の互いに遠く離れた場所で同時に発生していて、これは、異なった場所の居住者に感染させる高度に組織的な試みが、同じ時間帯になされたことを

示している。

3月初めのエボラの発生は、国全体での3種類のワクチンのキャンペーンと同時に起こっている——すなわち、WHO 指揮下の「国境なき医師団」(MSF) によるコレラの経口ワクチン・キャンペーン、それにユニセフ基金による髄膜炎とポリオの防止プログラムである。

MSF-WHO プロジェクトは、抗コレラ・ワクチン **Shanchol** を投与した。この薬の製造元であるインドの **Hyderabad** のシャンタ・バイオテクニクス社は、フランスのリオンに拠点をもつサノフィ・パスツール社の完全傘下の子会社である。以前は **Sanofi Aventis** と呼ばれていたこの製薬会社は、大株主 **L'Oreal and the Rothschild** グループに支配されている。

ユニセフに資金援助された経口ポリオ・ワクチン (OPV) は、世界最大のポリオ・ワクチン生産施設を運営するサノフィ・パスツール社の開発した病原菌株に基づくものだった。

髄膜炎ワクチン **MenAfrVac** は、インドの **Serum Institute** (血清研究所) によって製造されたものであり、これは大富豪 **Cyrus Poonawalla** の所有するもので、**Bill and Melinda Gates** 財団から開発資金を受けている。2013年、チャドでのこの同じ薬を使ったユニセフの運動が、ワクチンにつながる症状から40人の子供の死者を出した。**NSF** は、西アフリカの抗髄膜炎プロジェクトに参加していた。

国境なき医師団

フランスの役割に焦点を当てるなら、国連の子供機関の米国チーフに光を当てないのは不公平だろう。ユニセフ協会専務理事 **Anthony Lake** は、世界中の子供の保護者のポストとしては理想的な経歴をもっている。トニー・レイクは、かつてビル・クリントン大統領の国家安全保障アドバイザーであり、アメリカの軍事介入を担当した。そこにはユーゴスラヴ連邦に対するボスニア - ヘルツェゴビナ戦争、“**Blackhawk Down**”としてよりよく知られる、ソマリアの「モガディシュー戦争」、ハイチの「アップホールド・デモクラシー」作戦などがある。彼はユダヤ教に改宗した熱烈なシオニストであって、イスラム教徒が多数を占めるギニアで危険なワクチンを分配するためには、申し分のないボスである。

レイクの最も親密な国際的盟友で、彼の“拡張主義デモクラシー”や“人道主義的介入”の政策を共有するのは、フランス - ユダヤ人の英雄ベルナール・クシュネルである。この「国境なき医師団」の共同創設者にして左翼政治家 - 医者は、ネオコン大統領ニコラス・サルコジの下で外相に指名された。「医者よ、自分を治療したらどうだ！」と叫びたくなる衝動を抑えて、その前にエボラの追跡に戻ることにしよう。

国境なき医師団 (MSF) は、自分の時間と稼いだ金を、地球の紛争地域の貧しい人たちを援助するのに使う、利己心をもたない、勇敢な医者 of 団体だと自称している。多くのボランティアが、自分の名誉と道徳的善のために、現実に PR 通りのイメージを例証しているが、彼らが理解していないことは、MSF の企業スポンサーには、ビル・ゲイツの巨大獣的マイクロソフト、ゴールドマン・サックス、AIG、モーガン・スタンレー、バンク・オブ・アメリカ、BlackRock、Bloomberg、それにフランスの広告巨人 Havas が含まれていることだ。

これは言うならば、強奪企業の展示場のようなものだが、寄付者のリストに、大製薬会社がないことに注目すべきである。なぜかと言えば、薬の会社が慈善的にワクチンを配給しながら、ただの広告をしてもらうことは利益の衝突になるからである。地球的規模での倫理的不当性の印象を与えないように、国連は、その機関である WHO や UNICEF を通じて勘定を払い、大手製薬会社は利益を得、MSF の理事たちは、多くの目を輝かせたボランティアとともに、格安のワクチンを苦しんでいる大衆に分配するのである。

人間の悲惨に対する原理をもった倫理的“証言者”のふりをしながら、MSF の役割の機能的な部分は、大手の製薬会社からのワクチンを、開発途上世界の低収入・低教育の民衆に届けるベルト・コンベヤーになることである。

健康状態のよくない人たちに強い毒性をもつ薬を繰り返し与えることは——西洋世界の公的医療機関は自分たちの間ではそんなことはしないのだが——有害な副作用を特に子供に与える。ワクチン接種による死亡者数は、メディアによって報道されることはなく公的に隠ぺいされる。もっと悪いことに、そもそもワクチン計画は、大量虐殺を目的とする生物戦争研究室から出てきた抗体のテストに、人間を使うのを隠すために利用されてきた可能性が大いにある。

最高にうまい計画

かつてパリに拠点があり今はジュネーブにある国境なき医師団 (MSF) が黒い疑惑の雲の中に入ってくるのは、それが2段階の抗コレラ・ワクチンを配布しているという事実による。薬の投与は2週間の間隔を置くことになっていて、この繰り返しの手順は、エボラを試すチームがエボラ・ウィルスを犠牲者の体内に入れ、後に戻ってきて、モノクローナル抗体 (Mab) の解毒剤を与えるための、口実として利用された可能性がある。

(これは、MSF が一組織としてそれを知りながら、そこに関わったと言っているのではなく、その“連盟”的な運営スタイルのために、非倫理的な医者が、依頼者の製薬会社のため

に、ある地方のプログラムに侵入する余地を与えたということである。)

エボラ・ウィルスを与えられると、患者は高熱、嘔吐、下痢の症状を、8日以上たつて起こすが、2週間後ということが多い。スケジュールに従い再びやってきて、このひそかな薬剤テスト・チームは“コレラ・ワクチンの2回目投与”として、対エボラ抗体を与える。この不法な人体実験の完全犯罪は、なんの支障もなくうまくいったはずである。

しかし問題が起こるのは、被験者の多くが2週間以内に病気になり、ワクチン・センターまでの数キロを歩いて行けなくなったときである。この解毒剤の人間被験者になるはずだった最初の仲間があらかたいなくなり、この奥地でエボラのコントロールができなくなったとき、この秘密の臨床実験は、責任と法的訴訟の深い穴へと真っ逆さまに落ちていく。スポンサーの製薬会社のために尽力している、落胆した作戦マネージャーたちは、彼らの医療団体にギニアから即刻逃亡するよう命令する——感染の拡大とともに何百という犠牲者が身もたえしながら死んでいくのを放置して。パリやジュネーブに、これを気にかける者がいるだろうか？ 笑えてくるが笑いごとではない。

ギニアの感染症発生を WHO が報告したのは、最初の感染が一回りした6週間後であった。これは大勢の医療従事者が、この3種のワクチン・キャンペーンの間、この田舎地方に待機していたことを考えるとひどく奇妙な話である。これと対照的に、隣のセネガルの MSF 事務所は、発生から1か月もたたないうちにギニアのエボラ感染のことを知っていた。

死のゾーンの内側と外側

アフリカの地図を見ると、ギニア共和国（中央アフリカ海岸の「赤道ギニア」と混同してはならない）は逆向きの C の形をしていて、大西洋岸を円弧で区切り、南東へ内陸部に向かってカーブしている。ニジェール川が東から西へこの国を横切っている。その土手に沿った2つの分かれた地帯が、最初のエボラ発生の中心だった。

最初期の感染は、シエラ・レオネとリベリアの内側国境の **Guecedo** と **Macenta** という内陸部の県に集中していた。2番目に被害の大きかった地域は、**Boffa** と **Telimele** 地区の大西洋岸近くと、近くの島の首都 **Conakry** だった。コナクリーの死亡者は、中心的医療センター、**Donka** 病院に集中していた。

「赤十字赤新月社」の流行熱発生地域を示す地図において目を引くのは、セネガルとの国境沿いの広い帯状地帯に感染例がないことである。そこでは MSF が、80名の外国人を含む300名のスタッフでその地方本部を運営している。感染がないのは、セネガルのより乾燥し

た気象のためともいえるが、その逆の例として、サハラ砂漠の一部である乾燥したマリ共和国とのギニアの北国境近くで、エボラ感染が報告されている。

病気発生の最初の報告を受けて、セネガルのパスツール研究所ダカール支所は、移動微生物研究所を、ギニア保健省の要請を受けてコナクリーへ急送した。一方、ドイツの資金による、ガーナの Bernhard-Nocht 熱帯医学研究所オフィスは、WHO と協力して Gueckedou 県に移動研究所を開設した。

ギニア内部の MSF スタッフは政府の保健省と協力して、地方の診療所や病院、また血液サンプル収集センターに隔離部屋を設けた。WHO や CDC (米疾病予防管理センター) からの、エボラは水や空気感染しないという保証にもかかわらず、シエラ・レオネのトップのエボラ専門家を含む 100 人以上の看護婦や医者が、これまでに亡くなった。エボラ感染に関する間違っただ情報は、1995 年のザイールでの発生が、遺体を洗ったことによって広がったことを考えると、許せないことである。

パニックを利益に変える

もう一つの唾然とする驚きが、7 月、シエラ・レオネを走った明らかにより悪性のエボラ感染“第二波”とともにやってきた。しかもこれは、ギニアでこの流行熱が制御され始めた後のことだった。この第二の発生は、秘密の解毒剤実験の最中に、モノクローナル抗体 (Mab) の導入によって起こった突然変異に関係づけることができるだろう。この Mab に活性化されて人間に生じた免疫反応に直面して、ウィルスは、保護されていない人間の血液細胞との結合の速度を増すことによって、適応することができるものと予測される。もしこの変異が確認されれば、そのときは、すべての Mab をベースにした血清は禁止されなければならない。それは止めることのできない“スーパーウィルス”、エボラの新品種が現れる可能性があるからである。

ニュース・メディアは、バイオテック会社 ZMapp と Tekmira から出されているエボラの 2 つの可能的新薬に焦点を合わせている。どちらの会社でも、勢いづく突然変異の可能性を視野に入れて、FDA (米食糧医薬品局) のようなところの承認を得た方が、WHO や米国防総省 (DoD) からの巨大な供給者契約を確実に勝ち取るだろう。

エボラ・パニックから利益を得ようとする競走のダークホースは、フランスに本拠をもつサノフィ・パスツール社である。この世界で 3 番目に大きい製薬会社は、Serge Weinberg 代表の下で、臨床人体実験の最終ラウンドにおいて“後発者の成功”を収めたという評判を得ている。ワインバーグは、彼の新しい科学者チーフ Gary Nabel を、NIH (米国立衛生研究

所) のウィルス免疫学の主任の地位から引き抜くことによって、大成功を収めた。

サノフィのエボラ戦略は、そのサンフランシスコを拠点とするバイオテック・パートナー **Sutro Biopharma** 社によって、完全に包み隠されている。**Sutro** の社長 **John Freund** 医博は、元モーガン・スタンレーの重役である。腫瘍抗原 **Mabs** を用いる **Sutro-Sanofi-Nabel** モノクローナル抗体の戦略は、目的“非公開”のリストに入っている。…

この非倫理的な社長にとって、年月もかけず、サルによる試験という無駄なこともしないで、人間による薬のテストを行う誘惑は強いだろう——戦時下の日本の 731 部隊やヨゼフ・メンゲレ博士のように。2008 年、サノフィ社は、ロンドンのテレグラフ紙によれば、未テストの H5N1 ワクチンの実験を、ポーランドの 350 人のホームレスに対して秘密に行い、少なくとも 21 人を殺し、200 人を入院させた。

ある出血熱を冷血人間のように拡散させたことを、企業の貪欲だけのせいにはできない。なぜならバイオフェンスの安全保障もまた一つの動機だからである。西アフリカの熱病発生は二重の実験につながるものだったと思われる——熱帯病理学の応用問題として、またバイオ戦争に対する防御手段として。

容疑者リストの上に

生物兵器協定の加盟国ではあるものの、フランスは 1984 年まで署名をせず、その生物戦争研究を民間研究室の衣の下に隠して時間を稼いでいた。ルイ・パスツールのような優れた科学者を出した国として、またワクチン開発の先駆者として、フランスは生物戦争の主導的研究センターの一つであり、炭疽菌やサルモネラ菌、コレラや牛疫などの毒物を、フランス人の得意な料理のように武器化していた。戦後のフランス軍は、ドイツの恐ろしいバイオ兵器の技術を、イギリスやアメリカやソ連のように駆使する能力をもたなかった。ドイツのような“細菌”戦に対する情熱の代わりに、フランスの医学研究者たちは一歩先へ飛んで分子生物学に集中した。この分野でウィルスは、細胞膜や核酸のタンパク質との相互作用のために、きわめて興味をそそるものだった。彼らの進んだハイテクのおかげで、フランスの研究センターが現行犯で捕えられるということはめったにない——イランのパスツール研究所が、シャール軍隊のために、アフマトキシンを作っているのを発見されたときのように。

その上、フランスの生物学者は、彼ら自身のアフリカ植民地やベルギー領コンゴの熱帯病原菌に、深くかかわってきた経験がある。この国の最も顕著な近年の業績は、**Luc Montagnier** による HIV ウィルスの分離であるが、注目すべきは、彼がこれをアフリカ起源ではないと言っていることで、これはパスツール研究所が生物学的な材料の宝庫であることを示して

いる。

フランス人は韜晦や偽装の名人で、したがってフランスの軍関係者が、ジャン・レノのように、ギニアやシエラ・レオネあたりを闊歩している姿を見かけない。これに対し、リベリアで CDC (米疾病予防管理センター) の 50 名もの前線部隊が防護服を着て歩いているのは、あまりにも目立ちすぎる。

したがって、もしエボラが、西アフリカを不安定化させ、地政学的境界線を引き直すためのバイオ戦争攻撃であることがわかったとしたら、容疑者リストにエリゼ宮を載せることを忘れてはならない。フランス軍は (アフリカ) 大陸で最大の外国軍である。

ポリオ・ワクチン運動を用いた、ギニアでのサノフィ社のもう一つの計画は、秘密の抗体テストの成功率をチェックする、やり残しの仕事を可能にしたかもしれない。だとすると、それは悲惨な失敗だった。それともすごい成功だったかもしれない。どちらであっても、製薬とバイオテク産業は、エボラ危機からたっぷり利益を得るはずである。そしてバイオ防御研究の司令官や、高級官吏や、国連官僚たちは、何百万ユーロの研究開発契約に、黙っておとなくサインするであろう。

熱病のアフリカ

西アフリカの田舎地方の人々が、ワクチン接種運動とザイール・エボラの発生が同時であったことを理解した後では、外国基金による医療従事者たちは、怒った暴徒たちに襲撃され、シエラ・レオネのエボラ医療センターは放火されて焼け落ちた。薬品が問題なのであって解決ではないことが暴露された上は、軍隊が出動し、大衆暴動を鎮圧しなければならない。この地域のあらゆる国の国境は、現在、軍隊によって遮断されているが、この伝染病の背後にある真実も、おそらく犠牲者たちとともに埋葬されるだろう。

MSF、UNICEF、WHO、CDC、NIH、USAMRIID (米軍伝染病医学研究所)、その他、医薬=魔法の偽善者集団のアルファベットの行列について言うならば、自己保全の集団本能が、どんな正直な暴露をも防止するだろう。一日一日が過ぎ去り、犠牲者数が急騰するにつれて、犯罪の重みは増していく。この急速に広がる流行病と、それをもたらした者たちの法廷での追及は、すべてザイールに降る雪のような運命をたどることだろう。

(Yoichi Shimatsu はタイに本拠をもつサイエンス・ライター。香港で SARS が発生したとき、また東南アジア全域の鳥インフルエンザ危機のとき、主要な微生物学者や薬草研究者による公衆衛生セミナーを組織した。)